

【優秀賞】

命をつなぐ水

仙台市立南小泉中学校

三年 加藤 藤 ひかり

日本は蛇口を捻れば当たり前に出る水が出てきて、当然のように水が手に入る。しかし、それは当たり前のことではない。

国土交通省の資料によると、水道水をそのまま飲むことができる国は、日本を含めて十二ヶ国しかないことが分かった。世界は百九十六ヶ国であるため、水道水を飲むことができる国がどれほど少ないかが目に見えて分かる。もう一つ、ユニセフによると、現在、世界で六億六千三百万人の人が安全な水を手に入れることができないという。これらの人は身近に安心して飲める水がなく、池や川、湖、または整備されていない井戸などから水を汲んでいる。

自分の毎日の生活を振り返ると、水は朝起きてから夜寝るまで、生活を送る上で欠かせない存在である。私たちは水を飲みたい時に飲め、使いたい時に使え、どんな時でも自由に水を使うことができる。しかし、世界には何時間もの水が汲みに行かないと水が手に入らない人もいる。そのためにも学校にも満足に通えない子どもたちもいて、それが日常になっている。私も同じ年代の子どもや私よりも年下の子どもたちもいるのだ。

この夏、紛争で命を落とした医師、中村哲さんの映画を観た。干ばつのアフガニスタンで井戸を掘り、用水路を作り、六十五万人の人々を飢えから救った中村哲さん。どうして医師の中村さんが井戸を掘り、用水路を作ることになったのだろうか。

中村さんは医師としてアフガニスタンの無医村へと向かい、診療所建設に乗り出した。しかし、アフガニスタンを襲った大干ばつの影響で、農作物が育たず、人々は生きていけない状況となった。中村さんはその状況を

見て、生きるために必要なものは何かを考えた。それは「水」だった。中村さんは自ら井戸を掘り始めたが、井戸を掘って水が出てもすぐに干上がってしまう。そこで考えたのが用水路作りだった。中村さんは用水路作りをゼロから勉強し、前代未聞の大工事を開始した。それは苦難の連続だったが、七年もの歳月をかけ、念願の用水路を作ったのだ。用水路が運んだ水で、乾ききった砂漠は緑豊かな広大な森へと変貌し、食料を自給自足できるまでに回復した。中村さんはアフガニスタンの六十五万人の命をつないだ。そこには現地の人、子どもたちが手を取って心から喜び合っている姿があった。巨大な砂漠が緑地化した映像は忘れられない。水の偉大さに圧倒され、水の力はこんなにも素晴らしいのかと気づかされた。

中村さんの言葉で印象に残っている言葉がある。「百の診療所より一本の用水路を」この言葉に中村さんの人生をかけて挑む意志を感じた。目の前の問題だけではないのだ、今現在、そしてこの先もずっと現地の人が自分たちの力で生きていくために必要なことを一緒に進めていこう、そのためには水が何より必要なのだ、水を手に入れようという意志だ。

これは遠い国アフガニスタンで起こっていることでは済まされない。実際、鳴子ダムが渇水で危機的状態というニュースを目にした。三十一年ぶりにダムの貯水率が0%となり、農業用水など深刻な渇水が続いた。地球温暖化などにより、水に恵まれていた日本も水不足が深刻化している。

私たちにできることは何だろうか。

今身近で起きていること、そして世界で起きていることに関心を持ち、自分に何ができるかを考えること、いかに自分事として思いを寄せることができるか。節水が大切といっても、思うだけではいけない。自分の生活を振り返り、行動することが必要である。

よし、今日からやってみよう。時々忘れていた歯磨き中の水の出しっぱなしをしないようにしよう。決めた。水があることは当たり前ではないのだから。